MfG_J_Origin_of_Culture_in_Edo_Period

長岡藩源流の文化を訪ねて（お雛様、茶道、銘菓ほか）

特におひな様の寛永雛、元禄雛などという変化が、寛永、元禄、享保という江戸時代を代表する文化区分とぴたりと一致しているということで、それだけお雛様が、単なる人形の枠を超え、文化を代表するものだったということに感銘を受けました。

また江戸のお菓子の進歩も、天明の大飢饉、大天災の時代を経て、日本が米穀経済から商品経済に移行するなかで、四国の諸藩が特産物各初と財源確保の観点から和三盆という甘味を工夫し、全国に新しい甘味が広まって生まれたことがわかります。

(それも、そのころの屈指の名君といわれた松平治郷(不昧)、牧野忠精の治世下で、という、できすぎの物語。 忠精公は、飢饉、洪水の中、藩を治め、藩校設立も行ない、幕閣でも長期にわたり活躍するという、すごい人でした。また長岡藩という江戸・大阪から遠い場所で、最新の甘味材料を商品に取り入れた、大和屋さんの進取の心も、素晴らしいと思います。)

さまざまな文化の発展も、社会、経済の変化の中で行なわれたはずであり、これらの関係のなかで、興味深い話題を探しながら説明していきたいと、改めて思いました。

１．お雛様

(1) ″All about Japanese Hina Dolls″ 国立京都博物館の英文説明コピー
　　～簡潔明瞭な解説です。

(2) 1802研修内容

(3) 1702研修内容

２．茶道と宗偏流

～ 2017年10月22日、中央図書館での講演会、「茶の由来から、
　　茶道宗偏流と長岡藩牧野家との関わり」のメモのままです。
　　(小冊子リバーバンクの第10号(2015)宗偏流特集号は、春日が保有)

３．長岡の和菓子と、日本三大和菓子　～　未完成

(1) 長岡の和菓子

(2) 日本三大和菓子

(3) 和三盆

(4) 飴

補足　長岡ひなものがたり

補足　左右の話

All about Japanese Hina Dolls　　国立京都博物館
http://www.kyohaku.go.jp/eng/dictio/senshoku/hina.html

Every year on March 3rd, Japan celebrates the Doll Festival (Japanese, Hina Matsuri). Until recently, Girls' Day was also celebrated on March 3rd.
On this day every year, families set up a special step-altar on which to arrange their Emperor and Empress dolls, called "hina" in Japanese. They decorate this altar with boughs of peach blossoms and make offerings to the hina dolls of freshly made rice cakes (mochi), either flavored with a wild herb or colored and cut into festive diamond shapes.

In addition to dolls, these altars display many beautiful and luxurious decorative accessories. Look again carefully at the three altars. Can you see any things displayed on the two altars made in Kyoto that are not on the altar made in Tokyo? The Kyoto-made altars have miniature kitchens and hearths for cooking. You will never see such objects on altars made in Tokyo because kitchen implements are a specialty of doll sets made in Kyoto. Tokyo dolls have their own specialties too; doll sets from Tokyo are tall with many steps. They also have many chests, shelves and other furnishings to display with the dolls. This kind of lavish exhibit is a Tokyo tradition that has been handed down since the Edo period. In fact, Edo is the old name for Tokyo. In the old days, you could quickly see the difference in style between doll sets made in Tokyo and those made in Kyoto. Today, however, these differences have almost disappeared.

Do you know when the tradition of displaying hina dolls on March 3rd began? Because the dolls are dressed like court nobles from the Heian period (A.D. 794-1185), so you might think that the Doll Festival is a very old holiday. In actuality, however, the festival did not begin till the Edo period, in the 17th Century. The third day of the third month of the year was a holiday in Japan before that time, but there are no earlier records of doll displays on this day.

The Edo period began in about A.D. 1615 and continued for about 270 years until 1868. Many different kinds of dolls were made over this long period of time. Dolls that are standing up are called tachi bina, or "standing dolls."

Standing dolls are a very old type of Japanese doll that continued to be made during the Edo period.
Dolls that are sitting down are called suwari bina, or "sitting dolls." Sitting dolls evolved during the Edo period. There are many different categories of sitting dolls based differences in form, face shape and clothing.
The oldest type of sitting doll is called "Kan-ei bina." Look at the picture of two Kanei bina below.

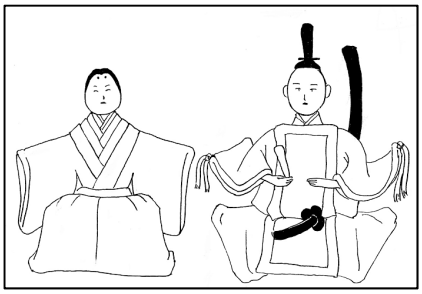
The Kan-ei bina are little dolls. The Empress doll has her arms spread apart, but her hands are hidden inside her sleeves. She wears a very old style of Japanese outfit, with a pair of wide culotte-like trousers called a hakama over her layers of kimono.
The second-oldest sitting doll category is the "Gen-roku bina." Look at the picture of a set of Genroku bina below.

They look somewhat like the Kan-ei-bina, but they are a little bigger. Can you see the difference between the Empress Gen-roku bina above and the Empress Kanei bina? Do you see how the Gen-roku bina is holding her hands out in front of her? Her clothing is different too. She is wearing an outfit similar to the twelve-layered court costume of the Heian period, called a juni hito'e.
In the years to come, the size of the dolls grew as a new kind of hina doll, known as the Kyoho bina, became popular.
These Kanei bina and Genroku bina were made in the 17th century, during the first half of the Edo period. At this time, the dolls came in sets of one or two and were displayed simply on a low, one or two-stepped platform with a "hina screen" behind them.

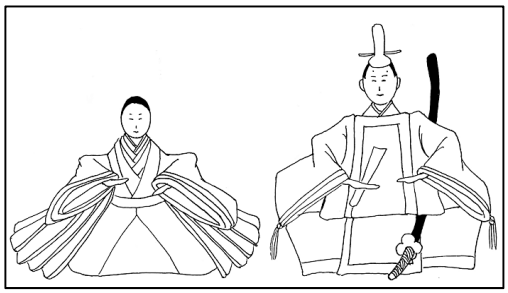
Other popular dolls were the round-faced "Jirozaemon" and the "Yusoku bina," whose costumes perfectly reflect the special clothing worn by courtiers.

By the late Edo period, it became popular to decorate the top steps of the altars with lavish pavilions. In Edo (Tokyo), the doll altars were often built seven or eight steps high! By the time the "Kokin bina," shown below, became popular, it had become the tradition to display other dolls below the imperial pair. Among these were the Three Court Ladies (Sannin Kanjo) dolls and Five Musicians (Gonin bayashi). Their additions made the Doll Festival displays more lavish than ever, creating a style that is still seen today.

Text by Shigeki Kawakami, Department of Applied Arts
English translation by Melissa M. Rinne, Department of Archives



Kan-ei bina



Gen-roku bina

180216_ひなものがたり研修内容（従来に追記）

※　毎年、展示替えがあるので、ガイドするには事前研修参加がお薦めです。

牧野ご当主は、衣紋道研究会会長を継続されている

有職雛　　流派に高倉流、山科流　下記の三種類
　直衣ひな　　貴族の普段着
　束帯ひな　　直垂が前に垂れている
　狩衣ひな　　縛ることができるように、肩、袖に紐がある
有職雛の特徴　　眉毛をそり落としている
　　～　既婚者は眉毛を落としお歯黒である。
五人囃子、五人雅楽　どちらが早いか不明だが、三人官女よりは時代が古い。
　しかし、三人官女の方が上段に飾られるようになり、今は、上から二段目の
　上位位置。
五人囃子の並びかた
　向かって右から左に、だんだん大きな音がだせるように服装も変化する。
　　（太鼓をたたくなど、脱いでいくようになる）

次郎衛門びな　～　丸顔に、蟇目鉤鼻。女雛は、肩に「かけ帯」～豪華な衣装
　　江戸時代中期に雛屋次郎左衛門という人形師が創始したことから
　　この名があり、団子のような丸顔に引目鉤鼻という、源氏物語絵巻に
　　描かれるような面貌が特徴的である。
　　雛の本流として、流行に左右されず公家や大名家に好まれたという。

古今ひな　～　享保雛以後新しく工夫された町雛の総称。
　　寛政（1789～1801）の頃，江戸の人形師，原舟月が，古代雛を参考に
　　して考案した雛人形。目の玉に水晶やガラスを入れた写実的なもの。

2018年配置、左側のおおきな三組のおひな様
　　真ん中のものが、井伊家の家来の家に伝わっていたもの。
　　女雛のお顔がなかったが、復元した。

雛を飾るときの男雛と女雛の位置
　関東では昔と今で変化し、関西と関東では左右反対が続いているようです。
もともとお雛様が女性の持ち物で結婚と共に移ることから、必ずしも日本全国
で左右の動向が一致しているわけではないそうですが、一説には以下。

京雛では向かって右がお殿様、関東雛では向かって左がお殿様です。
京雛の位置は、御所における玉座の位置に基づいています。
関東雛で、お殿さまが左側になったのは、明治になり、西洋の流れを受けて
国際儀礼である「右が上位」の考え方が取り入れられるようになったからと
云われています。
(大正天皇が即位の礼で、洋装の天皇陛下が西洋のスタイルで
皇后陛下の右に立たれた事からこの風習が広まったとされています。)

沙蔵の土蔵　2017年が築100年、T6建造
　もとは呉服屋、道路拡張に伴い、東面を北面に「引き屋」で移動した。

そのほかの飾り
五十六記念館　元禄ひな
河井記念館　井伊家本家から与板藩分家に明治時代初期(与板10代、11代)の
　ころに贈られたもの

さいわいプラザ　牧野家のお雛様
　今年の展示は、牧野家が京都におられたころの飾り方という。
　昭和47年に京都府立総合資料館(現　京都府立京都学・歴彩館)で展示
　以来の公開とのことです。
　三組以上の、各々豪華な雛段飾りの大集合ですが、藤堂家、蜂須賀家など
　からの、歴代の夫人の持参品とのこと。
　当時の「遊び道具」の精緻なしつらえもあり、素晴らしいの一言。

ニューオータニ　建物込み、組み立て式

幸町の「さいわいプラザ」内の自然科学博物館でも
牧野家伝来の雛飾りを公開されることがあります。

1703_お雛様と町歩き 資料

お雛様の始まり

雛人形の始まりは平安時代。 宮廷にて、姫君や貴族の女性たちが、男女一対の「ひいな」にきれいな調度品を飾って遊んだことから始まったとされる。
それに春の魔除けの風習が重なり、雛祭り。

牧野家と藤堂家、高倉家

現当主忠昌氏の祖母は藤堂家から、母は高倉家からお嫁入り。
アオーレのお雛様は、その祖母様がお若いころ、藤堂家から贈られたもの。
高倉家からのお嫁さんの縁から、牧野家は高倉流の流派を継ぎ、公家の衣装をを監修する立場にある。先年の2013年、伊勢神宮の式年遷宮の装束も、監修。

井伊直弼は安政7年3月3日（1860年3月24日）に暗殺。
以後、お雛様をまつるのは、廃止したらしい。

かも川本館のおひなさま

説明書きに高倉雛
江戸・宝暦年間(1751-1764)頃より、公家の装束を故実に正しく検証して作られたひな人形。特別に織り上げた裂を使用。
各客室に、それぞれふさわしい飾り。

沙蔵のおひなさまのなかに、彦根藩家中伝来のものがある。
(一階の中央に飾られている)

享保ひな、古今ひな
http://www.town.nakayama.yamagata.jp/gyosei/bunka/bunkahinaten.htm

享保雛（きょうほうびな）
享保雛は、江戸中期の享保(1716～1736)ごろに流行したといわれる雛です。
衣裳は金襴（きんらん）や錦（にしき）をつかった豪華なもので、男雛は束帯(そくたい…昔の朝廷の正式の礼服)に似た装束で、手に笏を持ち、太刀をつけています。
女雛は五衣（いつつぎぬ）・唐衣（からぎぬ）に似せた装束で、袴のなかに綿を多く入れて丸くふくらませ、宝冠（ほうかん）をかぶり、檜扇（ひおうぎ）を持っています。
享保雛には大型のものが多く、中には70㎝の雛もみられます。

古今雛（こきんびな）
古今雛は、明和(1764～1772)のころ、江戸の上野池端の大槌屋が十軒店の人形師、原舟月（しゅうげつ）に顔を彫らせて売り出したといわれています。

写実的な顔と、見た目のきれいな装束が人気を集め、江戸ばかりでなく京、
大阪でも大いにもてはやされました。江戸末期のころには、雛の眼に水晶やガラスが
はめ込まれるなど、つくりも精巧になっています。

有職雛(ゆうそくびな…高倉雛・山科雛)
一般の雛人形は、見栄えの良いようにつくられましたが、公家(くげ)衆の
装束は、身分や年齢、季節によって違うので、公家衆の実際の礼式に
かなうように正しく調べてつくられたのが有職雛です。

宝暦(1751～1764)のころつくられましたが、一般に売り出されたものではなくて、
公家衆が特別に注文してつくらせた雛です。朝廷に仕えて、公式の装束の
製作を受けもっていた高倉家、山科家に衣服をつくらせたことから、
高倉雛、山科雛とよばれることもあります。
かも川本館のは、高倉流。

ガラス眼
　江戸末期以降、ガラス眼が使用されるようになった。
(沙蔵の店主の話)

高倉流と山科流
　源有仁公創案の衣紋道は、その没後に藤原北家の大炊御門経宗と
徳大寺実能に伝えられましたが、大炊御門家では三代で関心を失い、
衣紋の技は助手をしていた高倉家に渡りました。徳大寺家は三代目に
猶子に入った実教が熱心に励み、彼が山科家の始祖となったのです。
こうして鎌倉・室町時代に、現代にも伝わる衣紋道の二流
「高倉流」と「山科流」が生まれました。

寛永雛と享保雛
　室町時代は立ち雛が主流でしたが江戸初期に坐り雛が考案され、
装束をつけた雛が誕生しこれを寛永雛(1624～1644)と称した、
特徴は頭は冠と共に一木造りで耳が大きく作られている。
享保雛(享保期　1716～36)1700年代から雛人形は急激に大きく
豪華になって(高さ36センチから1メートル位のもある)豪華絢爛たる
内裏雛は町家(豪商・豪農)で好まれた。享保6年の幕府の出した
触書により大きさを8寸(24センチ)以下と定められた。髪はすが糸で
植えてあり、男雛は冠をかぶり、女雛は装飾のある金属の冠をかぶる。

171022「茶の由来から、茶道宗偏流と長岡藩牧野家との関わり」のメモのまま

2017年10月22日 中央図書館講堂、「茶の由来から、茶道宗偏流と長岡藩牧野家との関わり」
宗偏流教授の川口宗伊さんの講演 （宗偏流のへんは、正しくは行人偏）
講師は、二年前に、小冊子リバーバンクの第10号(2015)で宗偏流の特集記事の執筆者。

1．茶の由来と団茶
茶道、500年の歴史。
　栄西が二度目の入唐のとき、茶の苗を持ち帰り、京都栂ノ尾で栽培し、抹茶として広めた。
その前に300年の団茶の歴史。
　団茶（だんちゃ）とは、紅茶または緑茶を蒸して型に入れて干し固めた茶を、削って、
碾(てん)という薬研(やげん)で末(こな)にし、沸騰した湯に少し塩を加えて末茶をいれ、
竹箸(たけばし)でかきまぜて茶碗にそそいで飲むというもの。
薬研は、時代劇で見かける、薬草などを細粉にひくのに用いる器具。
団茶は、日本には平安時代に最澄や空海といった唐に留学していた僧によってもたらされることとなり、嵯峨天皇を中心とした宮廷貴族に愛飲された。
しかし、遣唐使が廃止されると、やがて団茶の人気も衰退してしまい、日本において団茶はそれ以後流行せず、一時的な流行となった。

2．茶道宗偏流
 山田宗偏に始まる茶道の一派。
山田宗偏は、本願寺第10世証如に仕えた周善（仁科盛俊）が開いた長徳寺の第5世にあたり、本姓は仁科である。父より長徳寺を受け継ぎ周覚宗円と号したが、茶道を好み長徳寺を辞し母方の姓の山田を名乗った。
承保元年（1652年）に千宗旦のもとで皆伝を得て、洛北鳴滝村三宝寺に庵を結んだ。
三河吉田藩小笠原侯、越後長岡藩牧野侯、播磨龍野藩脇坂侯の大名方もその心を伝承。
江戸時代、.長岡藩の九代藩主・牧野忠精侯の頃から宗偏流が藩流のような形となり、
殿様も家臣も町人も茶の湯をやっていたよう。 明治. 以降も、. 大正から昭和にかけて長岡の多くの財界人も宗偏流の茶人であり、その伝統が二百数十年、現代に至るまで続いている。
　　～ リバーバンクの第10号(2015)では、維新後の長岡宗偏流の再興、そして明治から
　　大正期の宗家支援が記されています。

3．長岡藩牧野家との関わり
　長岡藩九代の忠精公は、雨龍の水墨画とともに、宗偏流茶道にも造詣が
深かったと言われています。 茶道は宗偏流、謡曲は金春流。
忠精公は、藩校を創設したり、越の雪を全国に広めたことでも知られ、長岡は、文化の香りあふれる全国屈指の藩でした。
～茶道が、日本文化の衣食住の奥深くにあることを、改めて感じました。

長岡の銘菓

1．江戸から明治・大正へと続く長岡の銘菓

越の雪　大和屋
　安永7年(1778年)、忠精公に病気元気づけに菓子を納め、好評。
天保元年(1830年)には故あって柳原町の会津屋次右衛門に替わって
長岡藩の鉄物御用を命じられ、千手町村から現在も店を構える柳原町に移転。
越後の餅米の寒晒し粉に四国特産の和三盆糖を土地の湿気に寝かして配合
した、大変口溶けの良い、上品な甘さのあるお菓子。
美しい越路の山々に清らかに降る雪になぞらえて生まれた詩韻に富んだ姿形
で、きめ細やかで風味が上品で、茶席の抹茶の点心にも用いられる。

大手饅頭　　紅屋重正　　文化二年(1805)、長岡城の大手門前に店を創業
　　江戸時代、最初は、飴を城に納入、
　　明治になって、東京で初めての内国勧業博覧会に銘菓大手饅頭を出品。
　　お酒がほのかに香る上質の皮に、北海道産の極上小豆と沖縄産の黒糖を
　　使った漉し餡が調和する江戸時代の風味、酒元饅頭です。
　　(銘酒吉乃川の酒糀を使用)

飴もなか　　大正元年（1912）創業の長命堂飴舗長
　　米の聖地でもある新潟県は、米菓が豊富であるのはもちろん、餅菓子のほか、
　　飴菓子も多くある。
　　水飴に寒天を加えて、グミのような食感になった『翁　飴』がよく見られるが、
　　長岡の長命堂飴舗は、あっさりとした水飴と香ばしい最中皮の『飴もなか』と
　　いう不思議なお菓子。　初代桂吉は、二年の歳月をかけ失敗苦心を重ねて、
　　飴もなかを完成させたと伝えられている。

元祖浪花屋の柿の種、ほか、新潟の米菓
　　新潟の米菓の全国シェア56・4％、1918億円　（平成26年 ）
米百俵本舗の干菓子『米百俵」

2．日本の三大銘菓
　長岡藩大和屋の越の雪とともに、金沢森八・長生殿、松江風流堂・山川と
される。
金沢森八・長生殿
前田利常公の創意と小堀遠州卿の命名により生まれた長生殿。
三百数十年間かわらぬ製法を守り続け日本三名菓の一と称えられている。
松江風流堂・山川
茶人として名高い不昧公（1751-1818）の好んだ代表的な名菓を復元。
山川は＜赤＞と＜白＞の対で、＜赤＞で紅葉の山を、＜白＞で川(水)を表す。

春の「若草」、秋の「山川」、そして「菜種の里」が「不昧公お好み」三大銘菓。
松江彩雲堂・若草～　この不昧公の「若草」を、明治の中期に彩雲堂が復刻。
切り分けた求肥にそぼろをまぶす。(実際に食しましたが、美しく、おいしい。)
松江三英堂・菜種の里
～　かつて松江に旅行したが、松江の町全体が不昧公であったことを、
　　思い出します。

3. 和三盆の出現と和菓子
三大銘菓をはじめ、江戸後期に全国に和菓子の生産が始まった。
そのカギは、和三盆の開発である。　簡単にらネットでの調査結果を掲げる。

和三盆(わさんぼん)は、主に香川県や徳島県などの四国東部で伝統的に生産されている砂糖の一種である。黒砂糖をまろやかにしたような独特の風味を持ち、淡い黄色をしており、細やかな粒子と口溶けの良さが特徴である。
三盆の名は、「盆の上で砂糖を三度「研ぐ」」という日本で工夫された独自の精糖工程から来たもので、高級砂糖を意味する。
日本では江戸時代に砂糖の存在が既に知られていたが、サトウキビの栽培地は南西諸島に限られており、作られる砂糖も黒砂糖が一般的であった。
やがて徳川吉宗が享保の改革において全国にサトウキビの栽培を奨励すると、高松藩が特産物創生と財源確保を目的としてこれに呼応した。その後、徳島藩でもサトウキビが育てられるようになり、領内各地で栽培できるまでなった。
しかし精糖の方法については不明だったため、他国における秘伝扱いの情報を収集し、高松藩とほぼ同時期の1700年代末に精糖方法を確立させた。
徳島県で生産されている和三盆を阿波和三盆糖、香川県で生産されている和三盆を讃岐和三盆糖と呼ぶ。
和三盆は貴重な特産品として諸国へ売りに出され、全国の和菓子や郷土菓子の発展に大いなる貢献を果たした。

4. 飴
飴は、昔は調味料としての役割、つまり、甘味料として使うことが多かった。
『日本書紀』にはすでに「あめ」が登場しており、この「あめ」は水あめの事。
麦芽にはジアスターゼという酵素が多く含まれ、これが炭水化物に作用すると麦芽糖になる。
でんぷんに酵素である麦芽を加えると、もともと何の味も無いでんぷんから、甘い糖の溶液ができる。これをしぼって煮詰めると水あめができる。
古代の人々は何らかのきっかけで、この化学反応を発見し「水あめ」を作り出した。「あめ」という言葉の語源は「あま味」「あま水」つまり「甘い」という言葉から来ているらしい。そして「水あめ」は貴重な甘味料、栄養源として人々の生活になくてはならないものになった。
江戸時代、飴だけでなく、砂糖も、薬屋で売っていた。

補足　越後長岡ひなものがたりについて

戦後70年。戦災を乗り越えたひなたちを長岡駅周辺を中心に市内約50箇所で展示
　　アオーレ(ホワイエの今町・小国コラボ)、市民協働センターの市内趣味の会)、
　　グランドホテル(牧野家のおひな様)、
　　カーネーションプラザの保育園作品、ギャラリー沙蔵(元禄・享保びな他)、他

　　山本五十六記念館の元禄雛、河井継之助記念館の与板藩主びな

長岡の各地に大切に保存されているおひな様が、大手通りをメイン会場として
各所に展示。愛らしいつるし雛をはじめ、歴史ある元禄雛や享保雛、木目込み雛、
市内保育園児たちによるアイデアあふれる創作雛人形など、バラエティに富んだ
“ひなめぐり”を楽しめます。　期間中は、古布を使ったちりめん細工の体験や、
おひな様の切り紙づくり体験なども開催。

2017年2月16日～3月8日　※時間や休日は各店舗によって異なる
越後長岡ひなものがたり実行委員会
料観覧無料（雛人形観覧以外、一部有料施設あり）

2度の戦禍と天災から生きのびたひなたち。長岡の各地域に大切に保存されている
これらおひな様を展示いたします。時代を超えても変わらぬ親の想いに触れながら、
ご家族とともにお楽しみください。

2016年実績
アオーレ長岡ホワイエ
　越後長岡　ひなものがたり　伝える想い　のお雛様の展示を開催しております。
市民協働センターでは、ひな祭りのパッチワークのタペストリーが展示されています。
　　長岡市内のパッチワークのサークルの手作りタペストリーです。

さいわいプラザ・科学博物館では、
　長岡藩主牧野家ゆかりのおひな様展」が展示　（３ /13（日）まで）。
　こんなに手の込んだ、厳かなミニチュアが、当時作られていたことに驚く
河井継之助記念館では、
　「与板藩主びな」が展示　（3/9（水）まで）。

補足　　男雛と女雛の位置について
　　親王飾り
　　筒描き

男雛と女雛の位置について

雛を飾るときの男雛と女雛の位置については、昔と今、関西と関東では左右が反対になっています。雛飾りで左右というのは、
“左近の桜”（さこんのさくら）“右近の橘”（うこんのたちばな）というように、内裏さまの方から見ての左右をいいます(左大臣・右大臣も同様)。
　男雛と女雛の位置がかわったのは、昭和になってからのことです。昭和天皇の即位式が京都の紫宸殿（ししんでん）で行われたとき、天皇の高御座（たかみくら）が中央にあり、向かってその右方のややうしろに皇后の御帳台（みちょうだい）がおかれてあったことから、それにならったようです。

男雛（お殿様）と女雛（お姫様）の左右の位置はどちらが正しいの

現在一般に広く売られている雛人形は関東雛と言い、
向かって左にお殿様が座っているものになります。
逆に向かって右側にお殿様が座っているものは京雛と言われます。
京雛では向かって右がお殿様、関東雛では向かって左がお殿様です。
京雛の位置は、御所における玉座の位置に基づいています

日本古来の「左上座」で言えばお殿様が一番偉いのですから向かって右側に座るのが慣わしと言えます。
では、なぜ関東雛ではお殿様が向かって左側に座っているのでしょうか。
これには大正天皇が深くかかわっています。

明治時代、西洋の流れを受けて国際儀礼である「右が上位」の考え方が取り入れられるようになりました。
大正天皇が即位の礼で、洋装の天皇陛下が西洋のスタイルで皇后陛下の右に立たれた事からこの風習が広まったとされています。
明治天皇の時代から皇居は東京に移っておりましたから関東を中心にこのご即位時のスタイルが定番となっていきました。
全国的にも今はこのスタイルが主流となっています。

また好まれる顔も関東関西に違いがあります。
関東は目が大きめで口元がかすかにほころびふっくらした可愛らしいお顔が人気ですが、関西では切れ長の目に鼻筋の通った高貴なお顔，細面のいわゆる京美人が好まれるそうです。実際のところ、なかなか顔立ちから関東雛と京雛判断するほど明確な

顔の特徴ははっきりしていませんが、雛人形の商品ごとに、そのお顔は随分と違うことは
比べてみると良くわかるものです。

親王飾り

(1) 雛人形と親王飾り
娘の幸せを祈り、お守りのような意味を持つ雛人形ですが、
男雛・女雛のふたりだけをお飾りする飾り方を、親王飾り(しんのうかざり)と言います。
http://www.rakuten.ne.jp/gold/komari/hinaningyou/hina-015-sinnou.html

お雛様が娘なら、隣にいるお殿様は未来の旦那様。雛人形はこの2対が必須と
なるので、親王飾り(平飾り)は雛人形の基本と言うことができます。

(2) 歴史
雛人形の始まりは平安時代。宮廷にて、姫君や貴族の女性たちが、男女一対の
「ひいな」に

きれいな調度品を飾って遊んだことから始まりました。それとは別に、3月はじめの「巳の日」、
幼児のそばに「紙雛」などの魔除け人形を置いて厄祓いをするという習慣があったのですが、
それと「ひいな遊び」がくっついて「ひな祭り」が盛んになっていったのです。

はじめは平台を配してお内裏様とお雛様を並べた親王飾りが主流。
段飾りが盛んになったのは元禄時代から。

(3) 雛人形の飾り方、配置
一般的に「殿」と「姫」を中心に飾り、「屏風」「雪洞」「三宝菱台」「桜橘」を飾ります。
親王飾りはお内裏さまとお雛様だけのシンプルなものですが、その分ふたりの衣裳や、後ろに
置いている屏風が際立つつくりとなっています。高級な西陣織金襴や唐織、天皇のみが着る
ことを許される麹塵、友禅などの華麗な衣裳を着付けしたものや、豪華な蒔絵風の屏風を
飾ったものもあります。
殿は向かって左に置き、姫を向かって右に置いて飾ります。
しかし京都では現代でも皇族の並びの、いにしえの礼法で逆に飾っています。

(4) 高倉流
江戸・宝暦年間(1751-1764)頃より、公家の装束を故実に正しく検証して
作られたひな人形。特別に織り上げた裂を使用。

筒描き

筒描き染めの一番の魅力は、大らかでのびのびとした文様の躍動感と
流麗さだとよく言われます。
筒描きに用いる『防染糊』が使われ始めた歴史はかなり古く、
奈良・鎌倉・室町中期時代頃との事です。
『防染糊』の発生には、当時の日本の食生活に密接な関係があります。
当時の主食のいろいろな穀物のなかで、稲の米・糯米の粘着性に着目し、
粘着力を高める技術が考案され、物と物を接着させる『糊』に加工されました。
この『糊』は織りには茶屋染めや友禅染めの糸目糊に、型染めでは模様染めの
防染糊として用いられてきました。
しかし、筒描きという染色法の始まりについては、まだ詳らかではないようです。
ただ、その魅力が一番華やかだったのは江戸時代ではないかと思います。

世界の染色のなかで糊を防染手法に使うのは、中国の印花布を除いて
日本以外にほとんど見ることがなくおかげで他に例を見ない、
筒描き独特の風合いと、躍動感を持った独自の染色文様が生まれました。